

聖書:サムエル記第二6章12～23節

説教:卑しめられるために

はじめに

今年のアドベントは、サムエル記第二6章、7章を開きながら主の御降誕を待ち望む意味を考えています。前回のことを簡単に振り返ります。ダビデは、神の箱を自分の住まいの近くに移そうと思い立って大々的にパレードを行うのですが、その途中で荷車を引いていた牛が暴れ出し、神の箱が車から落ちそうになってしまう。そばに立っていたウザが手を伸ばして箱をつかむと、主の怒りが燃え上がり、ウザはその場で死んでしまいます。ダビデはこれを見て、急遽神の箱をオベデ・エドム家に回し、パレードは大失敗に終わってしまいます。今日はその続きを見ていくのですが、ここにどんな恵みがあるのかを考えていきます。

1 神の箱

1) オベデ・エドム家で起きたこと

オベデ・エドムは、ウザが神の箱の傍らで主に打たれたのを見たばかりですか。そんな神の箱が自分の家に運び込まれたのですから、これはどうなるのかと恐れたでしょう。ところが、意外なことに神がオベデ・エドム家を祝福されるということが起きた。ウザに対してあれほどの厳しい怒りを燃やしておられたのに、どうしていまは祝福に変わったのか。オベデ・エドムが立派な信仰者だったから、ということではなく、やはりダビデに目を留めてみるべきでしょう。

2) 罪を悔いる

ダビデが神の箱を移そうとしたのは、それは純粋な信仰によるものだったのでしょうか。しかし彼も弱い人間なのです。ついきのうまでサウル王にいのちを狙われ、地べたを這いつくばるようにして逃げ回っていた人間が、いきなり高い地位と大きな権力を手にしました。どうしても誘惑に駆られます。神の箱を移す作業をはなばなしい国家的事業に仕立て上げ、自分の力を人々に見せつけたいと考えた。三万人の軍隊を配置し、新しい荷車をつくって神の箱を載せ、沿道には民衆を並ばせてパレードを挙行しようとしていました。その結果、ウザ打ち事件が起きてしまった。これを見たダビデはどう思ったか。聖書にはこう書かれているだけです。8節。「ダビデの心は激した。」

いつときは自分を誇ろうとしたダビデですが、やはり霊的な感受性は鈍っていません。この事件は自分の罪によるものであるとすぐにわかった。主の怒りは必ず自分にも必ず及ぶだろうと覚悟もしたでしょう。ところが意外なことが起きた。12節。「『主が神の箱のことで、オベデ・エドム家と彼に属するすべてのものを祝福された』という知らせがダビデ王にあった。」

これは神の怒りは去り、いまは大変喜んでおられるというしるしです。ウザが打たれ、神の怒りが降ったのは、ダビデの罪によるものでした。それがいま神が喜んでおられるということです。このことは、ダビデが自分の罪を悔いているのを神がご覧になり、その罪を赦されたことを示します。ダビデがもう一度、神の箱を移そうと決断できたのは、このようにして神の赦しを知ったからでした。

3) ささげ物を献げて踊る

さて問題は、神の箱の運び方です。前回と同じ方法でやるわけにはいきません。今度はまず主に伺い、主の方法で行うことにします。13節。「主の箱を担ぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは、肥えた牛をいけにえとして献げた。」ここに二つのことが書かれています。一つ目。主の箱はそもそもレビ人によって担がなければならないことは、モーセの時代から定められていました。ダビデは、その方法に従った。そして二つ目。肥えた牛を献げます。17節後半にも、「ダビデは主の前に、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げた」とあります。これは何を意味するか。聖書がいつも問いかけてくるのは、あなたはどんな心で行うか、そのことです。形を整えればよいわけではありません。ダビデは自分の罪が赦されたことに感謝してささげ物を献げようと思いました。罪が赦された喜びが内側からあふれてきて、「主の前で力の限り跳ね回った。」

ここに神の救いについての最も大切なことが凝縮されています。神の箱とは何かです。罪を悔いるならば、神は必ずその罪を赦し、もう一度神の御許に呼び戻して下さる。神の箱とは、その喜びを表す場所なのだ。だからダビデは裸になって踊るのです。

2 告白するダビデ

1) ミカル

そんなダビデのようすを、窓から見おろしていたのが妻のミカルでした。20節。「イスラエルの王は、今日、本当に威厳がございましたね。ごろつきが恥ずかしげもなく裸になるように、今日、あなたは自分の家来の女奴隷の目の前で裸になられて。」

ミカルの父サウルは初代のイスラエル王です。高貴な家柄のお姫様として育てられたミカルには、夫が下々の人々の面前で裸踊りをするなどとても耐えられない屈辱にしか感じられない。イスラエルの王は常に威厳を保つべきである。世の常識としてはそうかもしれません。

2) 主の前で

しかしダビデはこう答えるのです。21, 22節。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで、主の民イスラエルの君主に任じられた主の前だ。私はその主の前で喜び踊るのだ。私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。しかし、あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。」

ダビデのこのことばは、二つに分けることができます。まず前半です。主がこのような自分を選んでイスラエルの君主に任じてくださった。そのことが嬉しくて踊った、と言っています。いったいどんな自分でしょうか。いま見たばかりです。神を誇るのではなく自分を誇るという罪を抱えていた。自分こそ真っ先に死ななければならない者だったのです。ところがダビデが悔い改めたとき、主はその罪を赦し、もう一度イスラエルの王に立ててくださった。このようにしてくださった神に対して、どうして黙っていられようか。嬉しくて嬉しくて、喜び踊らないではいけない。それがダビデの前半のことばの意味です。

3) 卑しくなるだろう

そこに後半のことばが続きます。「私はこれより、もっと卑しめられ、自分の目に卑しくなるだろう。しかし、あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。」今回の事件をとおし、ダビデは高慢さを打ち砕かれ、謙遜にされていった。そんなことを言っているようなのですが、どこかすつきりしない印象がある。ダビデはこれから先、もっと卑しい姿になると言っています。これもそうです。「あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。」これも今ではなくこれから先のことを告げる。高貴な人々にではなく、むしろこの世で卑し

いとみられている人たちにこそ敬われたい。これはどういうことなのでしょう。

3 イエス・キリスト

1) 裸になられ

サムエル記を読んでいると、ダビデがやがて来られる救い主を証ししていると思われる場面がしばしば出てきます。彼はやはり預言者でもあるのです。ここもその一つだと思われます。ダビデは自分のこととして語りながら、同時に救い主のことも語っているのがふさわしい。

ダビデは主によって罪赦され、イスラエルの王に立てられたことを自覚したとき、女奴隷と呼ばれるような低い身分の人たちの前で裸になって喜び踊りました。そんなダビデの姿と、ダビデの子孫として来られた救い主を比べてみましょう。イエス・キリストも、父なる神によってイスラエルの王となりました。けれどもミカルの言うような威厳のある姿のままでいようとは思わず、自ら低くなられて、最期は衣を剥ぎ取られ、裸の姿で十字架におつきなされました。

2) 卑しめられていく

また救い主は、イスラエルの王でありながら、人々からはあざけられ、つばを吐きかけられ、拳で打たれ、この世でもっとも卑しい姿をとられていのちをお捨てになりました。こうして見ていくと、22節のダビデのことばは救い主を預言していると思われぬのです。

3) 女奴隷たちに敬われる

最後に考えます。救い主は、どうして卑しいお姿をとられたのでしょうか。ダビデは預言しました。「あなたの言う、その女奴隷たちに敬われるのだ。」マタイの福音書に山上の説教という箇所があって、幸いな人のリストが挙げられています。心の貧しい人、悲しむ者、柔和な者とずっと続きますが、いずれもどんな人ですか。ひとことで言えば、この世で成功しそうな人、むしろ愚かだと笑われるような人たち。それが女奴隷ということばの意味です。この世の高貴な人たち、成功した人たち、能力ある人たちではなく、卑しいと思われている人たちに敬われるために、この方は来られた。

では私たちはどうでしょうか。主の前に立つならば、ダビデが告白したように、私たちは主の前にちりあくたに過ぎない罪人であり、女奴隷のような者だったのです。ところが主はそのような者を

も顧みてくださり、罪を悔いる者にはご自分のいのちをあたえようとされる。私たちを救いたいと願って、卑しくなられた。このアドベントに、私たちはそのようなお姿で来られる主イエス・キリストを待ち望むことができる幸いを覚えたいと願います。